

\*\*\*\*\*

# 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 66 2023. 6

\*\*\*\*\*

北海道大学総合博物館ボランティアの会 2023年度(第21回)総会報告	---	在田 一則	1
総会講演会「北海道で始まった水草研究」を拝聴しました	-----	星野 フサ	2
北海道博物館を訪ねて	-----	高橋 道子	4
奥深さに魅了されて：初めての動物解剖体験記	-----	蒔田 青空	5
鯖(サバ)サンドはいかが？	-----	久末 進一	6

## 北海道大学総合博物館ボランティアの会 2023年度(第21回)総会報告

ボランティアの会 会長 在田一則

北大総合博物館ボランティアの会第21回総会および講演会が2023年5月26日(金)に総合博物館1階「知の交流」ホールで開催されました。  
以下に簡単に報告いたします。

総会 (13:30~14:00)

総会は14名が参加して、星野フサさんの司会で行われました。会長挨拶の後、新型コロナウイルス感染症拡大が札幌で始まった2020年2月以降の活動も含め、2022年度活動報告および2023年度活動計画について以下のように提案があり、承認されました。

### 1. 2022年度(2020年4月1日~2023年3月31日)活動報告

(以下では、太字は新型コロナウイルス感染症拡大以前の行事)

#### (1) 総会の開催

**第17回総会 2019年5月24日(金) 総合博物館1階の「知の交流コーナー」**

**講演会 講師：藤田正一名誉教授**

**演題：札幌遠友夜学校開校125年~その現代に意味するもの~**

第18回総会(2020年5月)は中止した。

第19回総会(2021年5月)は中止した。

第20回総会(2022年5月)は中止した。

#### (2) ボランティア談話会の実施

**第35回 2019年11月8日 岡孝雄「厚真の地震」**

2022年2月以降は開催できなかった。

#### (3) 博物館に押しかけよう会の実施

**第26回(2019年10月26日(土)、旧永山武四郎邸、10名参加)**

第27回(2020年2月29日(土)、小樽総合博物館運河館は中止し、2年半後の2022年10月22日(土)に行った、12名参加)

第28回(2023年4月22日(土)、北海道博物館、8名参加)

#### (4) ボランティアニュースの発行

2020年3月から2023年3月まで以下の10号を発行したが、コロナ禍による記事不足のため、年3回の発行となり、各号のページ数も少なかった。しかし、毎号300部ほど印刷し、各グループに配布するとともに、総合博物館1階受付や北大正門の北大インフォメーションセンター「エルムの森」にも置いた。また

北海道大学東京オフィス（東京駅日本橋口  
サピアタワー10F）にも置いている。

第56号（8ページ、2020年3月1日発行）

第57号（8ページ、2020年9月1日発行）

第58号（6ページ、2020年12月1日発行）

第59号（8ページ、2021年3月1日発行）

第60号（8ページ、2021年6月1日発行）

第61号（4ページ、2021年12月1日発行）

第62号（8ページ、2022年3月1日発行）

第63号（8ページ、2022年8月1日発行）

第64号（8ページ、2022年12月1日発行）

第65号（8ページ、2023年3月1日発行）

ボランティア ニュース編集委員会：星野フサ  
（委員長）・今井久益・久末進一・山岸博子

#### (5) ボランティアグループ連絡会

不定期であったが、1、2か月に1回、火曜日  
あるいは金曜日の午後1時30分からS224で開  
催した。

#### (6) 各グループの活動（2023年5月26日現在のボラ ンティア登録者数は227名）

植物・菌類（31名）、昆虫（26名）、考古学  
（37名）、メディア（3名）、化石（29名）、  
北大の歴史（3名）、展示解説（18名）、遠友  
夜学校（8名）、4Dシアター（12名）、チェン  
バロ展示（9名）、図書（10名）、第2農場（12  
名）、ハンズオン（6名）、きたみてガーデン  
（3名）、地学（20名）

#### (7) その他

2022年11月24日に総合博物館庭の落ち葉拾い  
を行った。（5名参加）

#### 2. 2023年度の活動予定（2023年4月1日～2024年3月 31日）

各指導教員のもとでグループ活動に協力すると  
ともにボランティアどうしの交流をさらに深め  
る。

##### (1) 全体の活動

勉強会（ボランティア談話会・博物館へ押しか  
けよう会など）・懇親会を適時開催する。

##### (2) ボランティア ニュースの発行

年4回の定期発行に戻す。「〇〇先生小伝」シ  
リーズは再開予定。各グループの活動の報告  
記事。

#### 3. 2023年度の体制

新型コロナウイルス感染症拡大以来、グループ連  
絡会の開催も不定期になったが、定期開催につと  
め、ボランティアの会の運営体制を立て直す。

##### 講演会（14:15～15:45）

総会に引き続き、14時15分から首藤光太郎さん  
（北大総合博物館 助教）による講演「北海道で  
始まった水草研究」を行った。

## 活動報告

### 総会講演会「北海道で始まった水草研究」を拝聴しました

植物ボランティア 星野フサ

2023年5月26日に開催された北大総合博物館  
ボランティアの会の総会に続いて「北海道で始ま  
った水草研究」と題する首藤光太郎先生による御  
講演があり、水草は不思議でたくましい生存戦略  
をもち、緻密で謎に満ちているという心打たれる  
内容の90分はまたたくまにすぎました。その報  
告をします。

日本の水草研究はこれまで関東以西を中心に進  
んできましたが、北海道には自然湖沼が圧倒的に  
多いことが分かったので研究テーマとして地道に  
調べてみることにされたそうで、水草の調査にと  
ても適している北海道といううれしい指摘に私は元  
気がわいてきました。

北海道が水草の宝庫であるとは驚きです。水草の調査となると水中はどれくらい底が不安定なのかわからないわけですから、命がけで水との戦いをされながら調査をされた苦勞が理解できます。

そして、講演いただいた水草の生き延びようとする彼らの戦略に強い憧れを持ちました。

2022年の調査では水質汚濁などが原因で激減しているナガバエビモの新産地を道北の稚内市と猿払村で5カ所も発見し、学会誌に英文で報告されたそうです。礼文島久種湖についても2022年に調査を行ったが、新産種3種・レッドリスト掲載種4種・外来種2種を記録したものの、ナガバノエビモだけは発見できなかったというのです。原因は何なのでしょう。このナガバノエビモは何かの見えない力を受けてサインを出しているのでしょうか。

浦幌町立博物館夜学校講座で2021年4月に北海道初発見の水草トリゲモについて報告されたそうです。イバラモ属は2亜属にわかれ、*Najas* 亜属と *Caulinia* 亜属があり、*Caulinia* 亜属の中にトリゲモがあり、*Najas* 亜属にイバラモがある。*Caulinia* 亜属は1年草で、秋にはほぼ必ず種子を作る。その種子の様子はそれぞれ違うので区別できるとのことです。

三木茂はメタセコイアなど植物化石の専門家と私は思っておりましたが、首藤先生は、三木茂が日本に生育する水草の研究もやっていたことを述べられました。ネットで三木茂を検索してみると、「三木茂が集めたメタセコイア化石と水草標本」という見出しが出てきます。首藤先生のご講演で三木茂の広い視野にわたる研究歴を知りました。

この春までのコロナウイルスに感染しているかどうかを調べるときに使用されるPCR検査に似た方法で水草の遺伝子の一部を増やし、そのルーツを調べているとお聞きして、いろいろの情報の入手方法を現代人が理解しておくことの大切さを再認識しました。そして、1年草の水草が水中で花を咲かせて実を結び新しい生育地を求めて水中を移動する困難さを思い描いて、我々も工夫して日々過ごさなくてはと学ばせていただきました。



陸上植物の場合、昆虫に受粉を手伝ってもらい子孫を残し、サクランボなどは人の手で授粉を助けてもらって実をつける戦略がある中で、水中で立派に子孫を残して生き延びている水草がいることを知りました。

マツモ属は果実につく針の本数で2種を見分けるそうです。顕微鏡がなくとも観察することができ、柱頭を含む針の本数が3本の場合はマツモ、5本の場合はゴハリマツモとなるのだそうです。

植物学者牧野富太郎についてNHKの朝ドラで最近取り上げられ、内容に興味を持っておられる方が多いのではと思います。先日はヒルムシロの水中葉は小さめですと水草のことが取り上げられ、植物研究の黎明期が伝えられております。

植物ボランティアの有志は先日、北大植物園を久しぶりに訪ね、レブンアツモリソウやクマガイソウが温室の前で見事な花を披露しているのを堪能しました。

だいぶ前になりますが、私は近所の店でクマガイソウを購入し庭に植えました。翌年にはそのクマガイソウは消えておりました。植物園の皆様の育てる技術の高さを評価したいと思います。広い園内を歩いていると、ミツガシワの隣でサトイモ科ウキクサ属のウキクサが水面を覆いつくしておりました。このウキクサや金魚鉢の中のキンギョを元気づけるために入れられる水草については誰でも知っていると思いますが、水草研究についてのお話は私のように初耳だった参加者は多かったのではないかと思います。

首藤先生今回のご講演の準備大変だったでしょう。ご講演いただいたことに感謝申し上げます。



## 活動報告

## 北海道博物館を訪ねて

## 北大の歴史展示ボランティア 高橋道子

2023年度初の「博物館におしかけよう会」(4月22日(土))は、北海道開拓記念館と道立アイヌ民族文化センターを併せて2015年4月に開館した北海道博物館でした。

この日の来館には、新札幌駅の大規模ターミナルで野幌森林公園行きのJRバスに乗りました。博物館前停留所付近は高原の避暑地のようにさわやかでした。特別天然記念物野幌原始林近辺の広大な自然は北の大地のイメージそのものです。

博物館はシンプルな名前どおりの、広大な森林の中に佇む「森のちゃれんが」です。私たち北大総合博物館ボランティア一行は、最初に地下講堂で「第20回企画テーマ展 あっちこっち湿地」についての講義をお聞きしました。講師の表溪太さんは、前日にテレビ出演されていたため、とても親近感がありました。

北海道にはラムサール条約(特に水鳥の生息地としての国際的に重要な湿地に関する条約)登録湿地が13か所あり、その他の湿地を含めると北海道には国内の90%の湿地が存在します。これはすごいことです。湿原・沼・川・湖・干潟のイメージが生態系・あらゆる循環・水の惑星地球として目の前に迫ってきました。

講義後に展示会場を拝見しました。北海道博物館では多くの体験型展示があります。まず湿地体験ブースでは、湿地を模したブヨブヨのマットを踏みつけキャーキャー言いました。「あなたにぴったりの湿地は？」では床の設問に答えながら進むと、宮島沼(石狩川流域湖沼群美唄湿原)に到着しました。どの写真パネルも素敵で観光意欲が増しました。

小さな新聞記事が目を引きました。長万部村静狩の泥炭形成植物群が開拓のために天然記念物指定解除を申請したことを伝える1939年3月10日函館日日新聞の切り抜きコピーです。講義でも伺った「石狩泥炭地の土地利用の変遷」によると、

99%の湿原が農地となりました。博物館が開拓で絶滅した標本を保管するのは、表さんが講義で語った「湿地が無くなったら、その存在が顧みられないから」であり、これら展示物は、開拓と保護は対立するという近代の事実を知らせています。

エレベーターで屋上に上がってみました。まだ開放されていませんでしたが、屋上スカイビューからの森と市街地の眺望は素晴らしいに違いありません。

子どもが毎年来館して、夏休みの宿題に限らずに記録を重ねたら、この大自然が人生体験になって良いだろうと思います。

私としては、雪の積もった時に再訪したいと計画しています。北海道博物館のカフェは焼きたてクロワッサンが最高に美味しく、珈琲にチョコが付くのがヨーロッパのカフェみたいです。エントランスで、あの映えるマンモスとナウマンゾウが威風堂々と迎えてくれるでしょう。



エントランスで私たちを迎えてくれるのはマンモス(右)とナウマンゾウ(左)でした

## 活動報告

## 奥深さに魅了されて：初めての動物解剖体験記

北海道大学理学院自然史科学専攻 修士課程2年 蒔田 青空

考古学ボランティア動物骨格標本作成班（以下骨格ボランティアという）の活動に出会ったのは大学院2年になってからでした。当時の私は道外の大学から進学した身で、また特にコロナ禍の真っ只中の大学院進学でもあったため、右も左もわからない状況での研究活動には思いのほか苦戦していました。そんな中で総合博物館の職員である工藤さんに研究相談に乗っていただいた際、ヒョウモンリクガメの解剖に誘っていただいたことが骨格ボランティアへの参加のきっかけとなりました。当初は、見学だけのつもりでしたが、気づいた時には私も道具を持って解体作業に参加していました。今思えば工藤さんの作戦だったのかもしれませんが。解剖の経験は高校生の頃にゆでた鶏、学部生の時に魚と、料理と大差ないレベルのものしかしたことがなかった私にとって、甲羅の切断や卵が残った卵管など、すべてが驚きの連続でした。この解剖は、私好みの「一般の人がしたくてもできない体験」まさにそのものでした。

カメを解体した感触が抜けきらぬまま数日が経ち、今度は家畜の解体作業があるという話を工藤さんから聞きました。解剖に対して抵抗もなくしむ私を見て、いろいろと見抜かれていたのでしょうか。私は学部生時代、地質学分野の中でも貝形虫という非常に小さい生物の化石を研究テーマにしていたため動物の骨というものには縁がなく、そして非常に魅力的に感じました。もちろん「解剖には汚れや腐敗臭がつきものでウシやウマといった大型動物ともなるとかなりの重労働にもなる」という説明もいただきましたが、その時の自分にとっては骨格標本を必要とする学術的な活動に関われることへの魅力が、それを軽々と上まわり、すぐにボランティアの担当教員である江田先生に参加を申し出ました。そして実際に取り組んでみると聞いていた通り、たしかに過酷な作業でした。

まず動物の遺骸は、臓器がほとんど取り除かれているにも関わらず非常に重く、そして硬いため、肉や皮

を切除するのは、かなり骨が折れました。そして遺骸から発せられる臭いはマスク越しでも、なかなか刺激の強いものでした。私は大学で獣医学を学んでいる2歳年下の弟と同居しているのですが、帰宅した私に弟が「早く洗濯して風呂に入れ、同じ部屋にいたくない」と言いました。獣医学部の授業で解剖には慣れているはずの弟が言うのですから、この臭いは間違いなく「本物」だと思います。私は白衣の上に雨合羽を重ねて着て、汚れ対策を万全にしていたにも関わらず、わずかに露出している髪の毛や皮膚に染み付いてしまったのかもしれない。私の嗅覚は解剖中に既に麻痺していたのかまったく気付かず、なんら苦にもならなくなっていたようです。今思い返すと、帰りの地下鉄の同じ車両に乗り合わせた乗客は、私から放たれる死臭に気付いていたのでしょうか。マスクでは太刀打ちできない強さですので気付かないはずもなく、また道民の皆さんの鼻に耐性があるはずもなく、ただただ寛大な方が多いということに感謝しています。

読んでいただいた方に、なにか骨格ボランティアのイメージを悪くしているようなイメージを持たせてしまうことは本意ではないので、本心で書かせていただくと、骨格ボランティアでの体験は、とにかく楽しかったです。世の中に一体何人、獣医師さんとお肉屋さん以外で家畜の解剖をした方がいるのでしょうか。亀の背骨が甲羅にくっついていることを知っている方は何人いるのでしょうか。骨格ボランティアは、こうした裏方と理解されがちな役割が、どれだけ研究活動に重要であるかを知る良い機会にもなりました。そして大袈裟ではなく今、私が目指す将来像にも大きな影響を与えてくれました。やはり、この大学の学生でなければ体験できなかった、学術的で貴重な体験にめぐり合わせてくれた江田先生と工藤さんには本当に感謝しています。ただ一つ残念なのは、もっと早く骨格ボランティアに出会っていれば、もっと沢山参加できていたはずだということです。と思ったのですが、これからも参加すれば良いだけの話ですね。

## 活動報告

## 鯖（サバ）サンドはいかが？

図書ボランティア 久末進一

黒海に面したトルコのその漁港では、海辺の屋台で、船から揚げたばかりのものや一夜干しのものまで、三枚おろしに開いて魚骨を取った鯖を、まっ赤に熱した鉄板の上に並べて豪快に焼く。群がった現地の人たちが、焼けた鯖の半身を玉ねぎなどと一緒にコッペパンを割って挟み、レモンの絞り汁をかけ、新聞紙にくるんで手づかみで立ち食いする。

そんなテレビの旅番組に驚きながら、映像だけではわからない、あの人たちの笑顔と味の秘密が知りたくなった。

試して見るべく近所のスーパーで見つけたパック詰めノルウェー産骨取り鯖を買い、魚焼き器でそのまま焼く。玉ねぎ半分を薄切りスライスで水にさらす。食パン2枚をトーストにして、これを適当に挟み、レモン汁をたっぷり振りかける。

一口食べると、あっ、美味しい！

生でも干物でも鯖本来の潮味に酸味が溶けて旨味に変わり、魚と玉ネギの臭みをレモンが打ち消して舌ざわりが良く、これは誰しもやみつきになる。あのハンバーガーなるものを食べた時以来の感動である。

18世紀に探検航海のための資金を提供してくれた後援者に敬意を表して、キャプテン・クックが自分の発見したハワイ諸島（旧名：サンドイッチ諸島）にその名前を奉った第4代サンドイッチ伯爵（ジョン・モンタギュー：1718-1792）は、探検並みの成否不明な賭け事が好きな自由人だったらしい。食卓につく暇も無いほどギャンブルに夢中

だったので、2枚のトーストにコールド・ビーフを挟み、ゲーム中でも簡単に食べる方法を思いついたという話もある。このハムや卵、野菜葉を挟む「Sandwich」を伯爵名から軽食名にしたのは、1770年頃の旅行家ピエール＝ジャン・グロスレイとの説がある。

1886（明治19）年の新聞記事にも、「西洋弁当」の肉挟みパンは、塩漬けした豚のもも肉を薫製にした「臘乾（ハム）」、「ジあむ」または「バター」をパン1斤に挟む、とある。

このパンに挟む思いつきの原理原則は、誕生から約250年も変わっていないことになる。そこには新味覚で簡便、安価に入手でき、いつでもどこでも自由に食べられる理想食品の夢が息づいていた。進化の源は、発想の初心にある。

焼きたての鯖サンドが、ハンバーガーに続いて北大祭企画のうまいもの通りに登場する時がいつか来ると、さばを読みつつ、鯖を焼く。

この旨さ、食べてみなくちゃAIにだってわかるまい。

〔参考引用文献〕

「事物起源辞典」（東京堂出版 昭和48年刊）



鯖サンドを作ってみました！

（星野）

美味しかったです！

（山岸）

## 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 66

- ◆編集人：北海道大学総合博物館 ボランティアの会（編集委員：星野フサ、今井久益、久末進一、山岸博子）
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2023年6月1日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティアニュースは、バックナンバーも含め、総合博物館ホームページからご覧になれます。  
<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>